小麦色の少女とユリアーナ
シュティフターの「白雲母」について

鈴　木　善　平

DAS BRAUNE MÄDCHEN UND JULIANA
Eine Deutung des Stifters ≪Katzensilbers≫

自然児小麦色の少女は，文明の生活の中で自分の内に失われたもののあるのを知り，去って自然の中へ帰る．自然児を打ちのめした文明の力を，自然の力よりも偉大であると思い違いしてはならない．すべての力を支配する真に偉大な法則が存在する．その法則は「おだやかな法則」である．シュティフターは小麦色の少女の幸福を願い少女をこの法則に委ね，養女ユリアーナの幸福を祈ってこの法則がユリアーナの上に働くことを願った．

1　小麦色の少女

小麦色の少女が，養父母とその家族のもとを去ったのは，その家で社交的な集いが開かれているときであった．小麦色の少女がこの農園の屋敷に住むようになってからすでに幾年かが過ぎ，少女はこの家族の一員としてこの家の生活に慣れ，この家の少女たちのするいろいろな仕事を学び，そういう仕事を皆と同じようにきちんと片付けることができるようになった．服装もととのえられ，立居振舞もしとやかに，すなわち，かっての野生の自然児小麦色の少女も，今では日常の生活にすっかり入ってしまっているかに見えたのであるが，社交的な集いの場においては，何かそういうことになじめないものがあったらしい．この屋敷ではすでにこうした集いは何度も催されていて，近隣の大人や若い男女や，また遠い首都からの知人などが集まっていた．それらの人々がみな楽しくしている中にあって，ひとり小麦色の少女だけは楽しまなかった．

この日も来客たちがあって，大広間では舞踏やピアノ演奏や罰金遊びといった都会風の娯楽が催されていたのであるが，このとき小麦色の少女はひとりその広間を離れ，庭に出て美しい衣服のまま地に身を横たえ，目を泣きはらして土を見つめていたのである．そこに来かかってこの有様を見た養父母には，小麦色の少女がなぜ泣き悲しんでいるのかわからない．確かに少女の身元は依然として不明である．しかしはじめて姿を見せたときに較べて，少女の状態はすべてよくなっていると言えるのではなかろうか．

"Liebes, teures Mädchen", sagte die Mutter, "betrübe dich nicht, alles wird gut werden, wir lieben dich, wir geben dir alles, was dein Herz begehrt. Du bist ja unser Kind, unser liebes Kind. Oder hast du noch Vater und Mutter, so zeige es uns an, daß wir auch für sie tun, was wir können."

"Sture Mure ist tot, und der hohe Felsen ist tot", sagte das Mädchen.

"So bleibe bei uns", fuhr die Mutter fort, "hier ist deine Mutter, hier ist dein Vater, wir teilen alles mit dir, was wir haben, wir teilen unser Herz mit dir." (1)

この言葉を聞いて少女は激しくすすり泣く．養父母のやさしさに感動すると同時に，しかし何かわかってもらえないもどかしさがあったのであろう．わかってもらえないものとは何であったか．上に挙げた文の少しあとに続く，別れのくちづけをする少女の痛ましさを描く箇所と，シュトゥーレ・ムーレの物語とを手掛りにして，それを考えて行きたい．

Da es nach einem Weilchen die Hand der Frau auf seinen dichten, dunkeln, schönen Locken spürte, die dort rnhte und freundlich drückte, sprang es auf, hob die Arme, die nun nicht mehr so voll und glänzend waren, auf, schlang sie fest um den Nacken der Frau, küßte sie auf die Wange, als müßte es Lippen und Zähne in dieselbe eindrücken, und weinte fort, daß die Tränen über die Wange der Frau herabflossn und ihr Kleid benetzten. (2)

胡桃山の上で，子供たちが祖母から聞いたシュトゥーレ・ムーレの物語は，おおむね次の通りである．(3)

厳格すぎるのと，家が大きくて仕事が多すぎて手におえないのとで，奉公人の居つかない農夫のところに，あるとき，1人の小麦色の顔をした，強い腕を持った大きな手伝女が現われて，ただ食べる物と時々は服やシャツに当てがう布地さえくれたら奉公したいと言った．農夫はその女をためしに使ってみようと思う．この小麦色の手伝女は，まるで人が2人来たように，家を治め仕事をきりもりした．けれども食べる物は1人分であった．農夫はうまい具合だと思い．その手伝女は何年もその家にいた．ある日，農夫が2頭の牛を売りに行ってその帰り道，軛を肩にかついで森の中を通っていると声がした．軛かつぎ,軛かつぎよ，シュトゥーレ・ムーレに言ってくれ．ラウ・リンデは死んでしまったと．軛かつぎ，軛かつがよ，シュトゥーレ・ムーレに言ってくれ．ラウ・リンデは死んでしまったと．」農夫は木々の下を見たが，何も見えず何も見つけることができなかった．彼は恐しくなってできる限り急いで歩き，汗水たらして帰りついた．夕食のときそのことを話すと，その大きな手伝女はおいおい泣いた．そして走って出て行ってしまって，二度と再び現われなかった．

祖母がこの物語を話したのは，小麦色の少女がまだ皆の前に姿を見せる前であったから，少女はこの物語を，木蔭にひそんで聞いていたのに違いない．やがて姿を見せ，子供たちに近づき．――この子供たちの一番上は少女で，小麦色の少女と同じ位の年かっこうである．この少女には妹と弟が一人ずついる．小麦色の少女は，遊び仲間を求めてこの子供たちに近づいたのである．――ついには子供たちの家に居るようになって幾年か，小麦色の少女は，ずっとこの物語を胸に，自分をシュトゥーレ・ムーレになぞらえつつ日々を過ごして来た．

小麦色の少女が，今，「シュトゥーレ・ムーレは死んでしまいました．高い岩は死んでしまいました。」と言ったとき，この言葉にどういう思いをこめていたのであろうか．養父母はこの言葉を，小麦色の少女の父と母は亡くなったという意味にとった．だが果してそうであるか．

私は，上に挙げた別れのくちつけの箇所とシュトゥーレ・ムーレの物語の中とにある，「腕」という言葉を取り上げて．それを考えて行きたいと思う．というのは，この「白雲母」の姉妹篇ともいうべき「森の泉」（1864年）においても，主人公である自然児の野性の少女が，いきいきと腕を動かしている場面が描かれており（4），従って，「腕」は自然児を描く上で一つの象徴的な意味を持っている，と考えるからである．

「シュトゥーレ・ムーレは，少麦色の顔をした，強い腕を持った大きな手伝女であった．」一方，「シュトゥーレ・ムーレは死んでしまいました」と言ったあとで別れのくちつけをしたとき，小麦色の少女の腕は，「今ではもうそれほどふっくらしてもいなかったし輝いてもいなかった．」

ここで，「白雲母」の物語の中で小麦色の少女の「腕」のことが記されている箇所を振り返って見よう．小麦色の少女が，最初に子供たちとその祖母の前に姿を見せたとき，少女は「裸の腕を体の両わきに下げていた．」(5)　少女が茂みへ後退りをしたので「葉むらが少女の裸の腕を覆った．」(6)　少女は次第に子供たちに近づくようになり，祖母の話す物語を草に寝ころんで聞くようになる．「少女は小麦色の腕の肘をついてほおづえをし，黒い目をまっすぐ祖母に向けていた．」(7)　また胡桃山であの前代未聞の激しい雹の嵐の襲来を予知したとき，少女は両手に柴の束を運んで来ては，積上げ，小屋の形に築き上げ，祖母と子供たちを木の下からこの小屋の中に避難させる．もし木の下に居たら取返しのつかないことになっていたであろう．雹がやんだとき，「少女は裸の右腕に血を流していた．」(8)　柴の小屋の中に一番最後に入った少女は，柴の束の下に入りきれず，氷の一片がかすめたからである．しかし少女はその怪我を全く意に介していない．その帰途，皆は増水した川の水没した橋を渡らなければならなかった．少女は一番末のジーギスムトンに向かって，そっとやさしく身を屈めて，「彼に腕をさしのべた．童子はその動作を理解した．彼は手を祖母から離して，小麦色の少女の保護のもとに入った．少女は彼を腕に取り上げ，彼は小さい両腕を少女の首に巻きつけた．そうして少女は，しっかりした確実な足どりで，童子を向こう岸へ渡した」(9)　この日初めて少女は子供たちの家まで来た．その後も家まで来て家の中へ入ろうとしなかった少女を，ある日子供たちは腕を引っ張ってとうとう家の中へ入れることに成功する．少女はまた，猛火に包まれた家の二階からジーギスムトンを救い出す．すなわち，人々がなす術もなくうろたえ騒ぐとき，「一つの黒い姿が家へ向かって走り，りすのようにぶどう棚をよじ登り，次の瞬間，窓から飛び込んで姿を消した．」(10)　そして間もなく二つの姿が窓に現われ無事救い出されたのである．この箇所には，「腕」という言葉はないが，ここにもまた少女の力強い腕の躍動があることは明らかである．

そして今，かつて生き生きと息吹き活躍した小麦色の腕は，もうそれほど満ち満ちた豊かさもなく，輝きも失ってしまっているのである．

「シュトゥーレ・ムーレは死んでしまいました．高い岩は死んでしまいました．」　この高い岩の物語もまた祖母の話したものである．(11)　皆の前に姿を見せる

以前だったから，小麦色の少女はこの物語も木蔭に身をひそめて聞いていたのに違いない．その高い岩は，その洞窟の奥深くに価値高き宝石を秘めた岩壁であった．文明の生活になじめず，自然の力に満ち輝く腕を失い，自分自身の内に価値高きものの失われたことを知って，自然児小麦色の少女は自然の中へ帰って行く．

以後，小麦色の少女は再び皆の前に姿を見せることがなかった.皆は手をつくして少女を探したが,少女の消息は知れなかった．皆の悲しみは深かった．歳月が流れ，祖母はすでに亡く，父も亡くなり，二人の姉は遠い土地に嫁ぎ，母は祖母になった．ジーギスムントは，今でも胡桃山に登る度に，小麦色の少女が自分の傍をサッと通り過ぎるような気がしてならない．そして，小麦色の少女は，かってどんなにしばしば自分たちに会うためにこの山に登って来て，遊び仲間の来るのをひとりぼっちで待っていたことかを思い,彼は心に深い悲しみを覚える．ジーギスムントは，小麦色の少女に世の中で本当に多くのよいことが与えられていてほしいと思う．

2　ユリアーナ

シュティフターの妻の姪ユリアーナ・モハウプトが，子供のいないシュティフター夫妻のもとに養女として迎えられたのは，1847年ユリアーナ６才のときであった．美しく，また将来有望な少女であったが，野性的で拘束されない性格であった．それゆえ，シュティフターの妻アマーリエの厳格さと衝突し，シュティフターはしばしば二人の間を執り成さなければならなかったと言われている．

1851年のクリスマス前，11才にもならないユリアーナは，養母との口論の末家を出た．シュティフターは視学旅行中であった．ユリアーナは鉄道馬車の道を走り続け，ついに疲れ果てて倒れた．旅館の主人に見つけ出され，その旅館で使ってもらおうとしたが断られる．富裕な製粉業者に引取ってもらおうとしたがそれも許されなかった．1852年の初め，ユリアーナは再びシュティフターの家に戻って来た．世間の口は，養母アマーリエを激しく非難した．こうしてこの事件は，多くの不和を家庭に持ち込んだのである．

シュティフターは，ユリアーナに対し，よいものはすべて与え，あらゆる手段を講じてしとやかな少女にしようと思った．

短篇集「石さまざま」がまとめられたのはこの年1852年である．すでに別々に発表されていた五つの物語を改題してそれぞれに石の名を与え，今回「石さまざま」として出すに当り，新たに一篇を，なわち「白雲母」を書き下してこれに加えた．

「白雲母」の主人公小麦色の少女は，シュティフターがかって会ったジプシーの少女を写して，ユリアーナの姿と重ねたものである．シュティフターは，この本を，12才の誕生日を記念してユリアーナに与えた。その際彼は，次のような献辞を書き記している．(12)

「ここに第一回の一冊の本を受取りなさい．これはお前のお父さんが書いた本です．最初にここに印刷してあるお父さんの言葉を読みなさい．それはお前が，いつもはお父さんの口から聞いた言葉です．この本にある子供のように，よい子になりなさい．そのことを心にとめて，忘れないでいなさい．もしいつかお前がよいことから離れようと思うようなことがあったら，この本を読んで，そういうことをしないようにしなさい.」

シュティフターのこうした意図や配慮も，成功したとは言い難かった．ユリアーナは一向にしとやかにもならず，「すばしこい，おてんば少女であった．家の中の定まった秩序に決して正しく順応しようとしなかった．だから幾度も厳しく叱られるのであるが，いくら叱られても，その叱責がユリアーナの機嫌のよい気分の妨げになることはなかった．それですでに18才になっていても，階段を歩いて降りようとせず，手摺に身を乗せて，ただもう飛んで滑り降りてばかりいたのである.」(13)　ユリアーナは，子供のとき予想されていた如く，非常に美しくなったが，しかし依然として野性的で，何ものにも拘束されることがなかったのである．

1859年5月6日，年来の友アイヒェンドルフ男爵夫人に，ユリアーナの死を報じた手紙（14）の中で，シュティフターは，ユリアーナのことを次のように述べている．「少女は，この数年で非常に急速に成長しました．非常にふくよかになりました．そして多くの人が美しいと言っていました．ユリアーナは，行ってしまう18時間程前まで，非常に陽気でいました．そうです，愉快にしていました，踊っていました，歌っていました，面白く話していました．家の中じゅうで，それどころか，しばしば玄関や階段の所でもです.」「行ってしまう18時間程前まで……」とある如く，この疑いもなく心の底から明るくて生活を楽しむ少女は，再びそして永久にシュティフター夫妻のもとを去る．

ユリアーナは，1859年３月21日朝の５時45分に家を出た，と前記の手紙は記している．朝食のとき家人はユリアーナのいないのに気付いた．呼んだがいなかった．彼女の部屋で見つかった１枚の紙片が，シュティフター夫妻を恐しい不安に突き落とす．「彼女は１枚の紙片を残し，それには，『私は母の所へ大きなお仕事に参ります』と書いてあったからです．ユリアーナの母親は15年か16年前に亡くなっているのです.」（同手紙）

シュティフター夫妻は，すべてを尽してユリアーナを

探し求めた．しかし，「4月25日，私共は，ユリアーナの遺体が，ドナウ河畔のマウトハウゼンの上手のザンクト・ゲオルゲン近くで，4月18日に発見されていたという通知を受取りました．医師の言葉によれば，3週間か4週間も水の中に横たわっていたあとだったのです．このかわいそうな娘は，18才でした．」（同手紙）

シュティフターは，ユリアーナの死の原因についていろいろ考えている．上記の手紙によれば，すでにユリアーナの遺書（めいたもの）を読んだとき，まだその生死は不明であったが，彼はユリアーナの自殺を予感した．しかしまた，調べを進めるにつれ，彼女は，彼女自身の内なる自然の，盲目的・破壊的な力によって，事故死に追いやられたのだとも考えるに至る．「しかし，精神錯乱して不慮の死を遂げたとも考えられます」と，彼は同じ手紙の中で言っている．「と申しますのは，私はどんな小さなことであっても，望み得る限りずっと調べを続けていますが，今私共の調べのつきました限りでは，生理のことが脳に影響を及ぼしたことが原因であると申してもよかろうかと思います．私共は，そのことにつきましては全く何一つ夢にも思いませんでした．去って行ってしまう前の数時間の，彼女の錯乱した行為のことを，私共は，彼女がすでに去ってしまったとき初めて聞きました．私共の目の前で起きた小さな徴候を，私共は理解しませんでした．」（同手紙）

先に述べたように，家を去る18時間程前までは，ユリアーナは明るく快活そのものであった．ユリアーナはまた，つねづね非常に健康で，シュティフター夫妻のもとにいた12年間の最もひどかった病気と言えば扁桃腺炎くらいのものであった．「それだけに一そう，あのようなことになろうとは予想もできませんでした．そして私共は今，この不幸が起きないようにすることができなかったということで，激しく自分を責めています．ユリアーナは，幸福な運命の方に向かって行くこともできたのでしょうに．私共はユリアーナにやさしくしていました．間違いをした場合も，ただ訓戒するだけで，それ以外の罰は決して受けませんでした．またユリアーナには，もらったり，もらうことを当てにしてもよいものが沢山あって，しばしばまるで子供のように喜んでいました．」（同手紙）

ユリアーナの死によって打ちのめされたシュティフターは，憐れな愛する妻を慰めようとするが，彼自身慰める言葉を持たない．実に，ユリアーナは，シュティフターが彼女のために書いて贈った「白雲母」の小麦色の少女の如くに，去ってまた帰らないのである．このとき，シュティフターの心には，小麦色の少女を去って行かせたことに対する悔いがあったに違いない．1864年，シュティフターは，「森の泉」を書いてユリアーナの第二の記念とし，主人公の野性の少女ユリアーナに幸福な運命の道を歩ませる．

3 白 雲 母

小麦色の少女は去って再び姿を現わさず，養女ユリアーナもまた去って永遠に帰らない．シュティフターがユリアーナのために書いた物語と同じことが，7年後，文字通りユリアーナの身の上に起きたのである．

かくして，この物語の「白雲母」という表題は一そう象徴的なものと感じられる．すでに述べたように，「石さまざま」の他の五篇がすべて，以前別の表題で書かれた物語に手を加えて，新たに石の名前の表題を与えられたものであるのに対し，この「白雲母」だけは，特に「石さまざま」のために書かれたものであり，別の表題を持たない．この点からしても，「白雲母」という表題は，この一篇を象徴するものとして，充分考慮されて用いられていると言えよう．

この「白雲母」（Katzensilber）という言葉は．どういうことを言い表わしているか．まず，シュティフター自身が，物語の中でこの言葉を使用している箇所を引用してみよう．

> Für sich allein standen die Kinder gerne am Bache, wo er sanft fließt und allerlei krause Linien zieht, und blickten auf den Sand, der wohl wie Gold war, wenn die Sonne durch das Wasser auf ihn schien, und der glänzende Blättchen und Körner zeigte. Wenn sie aber mit einem Schäufelchen Sand herausholten und gut wuschen und schwemmten, so waren die Blättchen Katzensilber, und die Körner schneeweiße Stückchen von Kiesel. Muscheln waren wenige zu sehen, und wenn sie eine fanden, so war sie im Innern glatt, und es war keine Perle darin. (15)

小川の水底にあって，太陽の光にきらめくとき，それは一見「砂金」に見えるが，手にとってよく見ると，それは「白雲母」である．子供たちに祖母が話してくれた砂金や真珠は，もうなくなってしまった．それらしく見えたが，実はそれは「にせ」であり，見せかけだけのもの，似て非なる偽りのものである．同時にこれは，一方見る者の側に即して言えば，そうでないものをそうであると見た錯覚であり，「思い違い」である．表題に用いられた「白雲母」という言葉は，このようなことを言い表わしている．

このことを確かめるために，グリムのドイツ語辞典を参照したい．同辞典の KATZENSILBER の項には，

der weisze Katzenglimmer のこととあって，次のような用例がある．

> und also glanzen (*glänzt*) ihr auch, und wan ihr in die prob kommen. . so ist nichts dann katzensilber.

そしてこのもう少しあとに，次のように記されている．

> *Dazu ein adj.* katzensilberisch, *falsch, unecht*: du katzensilberischer arzt. . . dasz wir nicht katzensilberische vernunft und philosophiam (*pseudophilosophie*) gebrauchen.

Katzensilber の katzen については，同じくグリムのドイツ語辞典の KATZENGOLD の項に，次のような説明がある．

> *der name ist gemeint wie* katzensilber (16.*jh.*) katzenglimmer, katzenerz, katzenglas, katzenpeterlein, katzenminze, katzenkorn, katzenglaube, *es sollte damit das falsche, unechte bezeichnet werden*:

そして次の用例がある．

> ist das wol gold was darin so glänzt? sagte jener. es ist keins, versetzte dieser, und ich erinnere mich dasz es die leute katzengold nennen. katzegold! sagte der knabe lächelnd, und warum? wahrscheinlich weil es falsch ist und man die katzen auch für falsch hält. GÖTHE

一見そのように見えるが，実はそうではない．そう見るのは思い違いである．と，こういう言葉を聞くとき，我々は直ちに，「石さまざま」の序文にある「偉大なものと小さなもの」についての，シュティフターの意見を思い起こす．その意見をここに，手塚富雄訳「水晶」所載の序文の中から引用させていただく．(16)

「――風の吹くこと，水のながれ，穀物の生長，海の波だち，春の大地の芽ばえ，空の光，星のかがやき，これらをわたしは偉大だと考える．壮麗におしよせてくる雷雨，家々をひき裂く電光，大波を打ちあげる嵐，火を吐く山，国々を埋める地震などを，私は前にあげた現象より偉大であるとは思わない．いや，むしろ，小さいものと考える．なぜなら，それらも，はるかに高い諸法則のはたらきによって生れたものにすぎないからである．それらは特殊の場所でのみおこり，一面的な原因からの結果なのである．まずしい鍋の中の牛乳を沸きたたせてこぼす力が，火を吐く山にこもるラヴァを押し出して山の斜面に流す力ともなるのである．ただ後者の現象が一そう目だつので，わけを知らぬ不注意な人たちの眼を，より多くひきつけるのである．しかるに，研究者の精神態度は主として全体的・普遍的なものに向い，ただそこにだけ偉大さをみとめることができるのである．なぜなら，それだけが世界をささえるものであるからである．特殊の現象はすぎさって行く，そのはたらきはしばらくすればほとんど認められなくなってしまうのである．」

「外的な自然においてそうであるように，内的な自然，すなわち人間の心についても事情はおなじである．ある人の全生涯が，公正，質素，克己，分別，おのが職分における活動，美への嘆賞にみちており，あかるい落ちついた努力とむすびついているとき，わたしはそれを偉大だと思う．心情の激動，すさまじい怒り，復讐慾，行動をもとめ，くつがえし，変革し，破壊し，熱狂のあまり時としておのが生命を投げ出す火のような精神を，わたしはより偉大だとは思わない．むしろ，より小さいものと思う．なぜなら，それらは，嵐や，火山や，地震などとおなじく，それぞれの一面的な力の所産にすがないからである．」

「われわれは人類のみちびきとなるおだやかな法則をみつけることにつとめたい．個々人の独立を目ざすもろもろの力が存在する．それらは，個々人の存立と発展とに必要な一切のものを摂取し利用する．それらの力は個個人の存立を確保し，同時にそのことを通じて，萬人の存立を確保する．（中略）人類ぜんたいの存立を目ざしてはたらく諸力があるのである．それらは個々人の力によって制約されるものではなく，むしろその反対に，それら個々人の力に制約を加えるのである．これが，人類ぜんたいの存立をめざしてはたらく諸力の法則である．それは正義の法則であり，徳の法則であり，各人が重んぜられ，敬われ，危害を加えられることなく他者と並存し，人間として，より高い行路を進み，隣人の愛と賞讃をかちうるようになること，また，すべての人間は他のすべての人間にとって一個の宝石であるゆえに，万人が宝石としてまもられんこと，を欲する法則なのである．この法則は人間が人間とともに住むところには，つねに存在し，人間が人間にたいして働きかけるばあいには，かならずあらわれる．」

「この法則のみが唯一の普遍的なものであり，支える力をもつものであり，けっして終ることのないものだからである．」

文明の生活は，自然児小麦色の少女の腕の力に満ちたふくよかさと輝きを奪った．しかし，文明のこの破壊的な力を，自然の力よりも強いと見るのは，思い違いすなわち「白雲母」である．なぜこれを思い違いであると言うことができるかと言えば，自然児小麦色の少女を文明の生活の中に入れることは失敗したからである．自然を人間の文明の秩序の中に組み入れようとする試みは失敗した．そうすることができると思ったのもまた，思い違い，すなわち「白雲母」であった．

思い違いをすることなく，文明の力よりも自然の力よりも更に偉大な，この両者を支配する「おだやかな法則」の存在に目をとめようと，シュティフターは主張するのである．このおだやかな法則の力は，文明の力よりも自然の力よりも偉大であるがゆえにこそ，ジーギスムントは，小麦色の少女をこの法則に委ね，シュティフターは，この法則がユリアーナを支えるようにと願うのである．

4　結　び

シュティフターは，短篇集「石さまざま」を編むに当って，新たに「白雲母」一篇を書き加え，それと同時に，「序文」を草して，おだやかな法則の存在と，その法則の支配することに対する確信を述べた．それゆえ，「白雲母」には殊にも，おだやかな法則が支配していると考えられる．だからこそ，ジーギスムントは，小麦色の少女の幸福を思うことができたのである．

シュティフター自身も，1853年3月31日付，アイヒェンドルフ男爵夫人宛ての手紙の中でこう言っている．「私は，白雲母を最もよい最も優しい作品であると思っています．そして小麦色の少女の，彼女が子供たちを求めそして最後には再び避けて去って行かないではいられなかった時の，言い表わすことのできない感情を，最も哀切な感情であったと思っています．それゆえ私は，この憐れな少女を，最大のいたわりをもって取り扱い，そしてこの少女の境遇を，最も愛情に満ちたヴェールでおおって取り扱っていることを，はっきり感じていました．」(17) ここに「最も愛情に満ちたヴェールでおおって」と言っているのは，おだやかな法則に委ねてと言うに近いと考えてよかろうと思う．

しかし現実には，破壊的な力が優位にあるかに見える．文明の生活は，自然児である小麦色の少女の腕から，ふくよかさと輝きを奪った．また「白雲母」を書いてユリアーナに贈り，ユリアーナの上におだやかな法則の支配することを願ったのに，その願いも空しく，18才のユリアーナは，自分自身の内に働いた破壊的な力によって死に追いやられた．そしてこの破壊的な力は，やがて今度はシュティフター自身の内に，最も痛ましいかたちとなって現われる．すなわち，彼は肝臓癌の苦痛の激しさに堪えかねて，剃刀を取り喉を切り，一日後亡くなる．こうして破壊的な力は，おだやかな法則を確信する彼すら屈服せしめたのである．そのような破壊的な力を，何ものにもまさって大きいものであると思い違いをしてはならないと，破壊的な力の大きいことを知るシュティフターは言わずにはいられなかった．

先に少し触れたように，ユリアーナの不幸の5年後，シュティフターは再びユリアーナを記念して「森の泉」を書いた．そしてここで彼は，野性の少女ユリアーナに，「白雲母」の小麦色の少女とは別の道を，すなわち，親しい人々と共なる幸福の道を歩ませる．ユリアーナの幸福を願い続けて来た，そして彼女の死後もそれを願い続けるシュティフターは，物語の結末を，「白雲母」のそれから「森の泉」のそれへと改めずにはいられなかった．しかし「白雲母」と同じく，「森の泉」もまたおだやかな法則の支配する世界である．「白雲母」において見られた，シュティフターのおだやかな法則の存在に対する確信は，「森の泉」を書くことによって更に堅くされ，その法則の支配を願う願いは，一そう切実なものとなったと言えよう．

〔註〕

使用テキスト

Adalbert Stifter Gesammelte Werke, hrsg. von Konrad Steffen, Basel und Stuttgart: Birkhäuser Verlag 1963.（GWと略す）

Adalbert Stifter Sämtliche Werke, hrsg. von Franz Egerer u. a., Hildesheim: Verlag Dr. H. A. Gerstenberg 1972.（SWと略す）

(1) GW, Ⅳ. S. 315.
(2) Ebenda, S. 316.
(3) Ebenda, S. 247～248.
(4) GW, Ⅴ. S. 324.
(5) GW, Ⅳ. S. 257.
(6) Ebenda, S. 258.
(7) Ebenda, S. 259.
(8) Ebenda, S. 266.
(9) Ebenda, S. 268.
(10) Ebenda, S. 305.
(11) Ebenda, S. 254～256.
(12) Frank, Ernst: Liebe zu Stifter, Augsburg: Adam Kraft Verlag 1968. S. 105からの孫引き.
(13) Ebenda, S. 106. からの孫引き.
(14) SW, XIX. S.157～159.
(15) GW, Ⅳ. S. 257.
(16) シュティフター作・手塚富雄訳「水晶」岩波文庫（昭和36年）83～92頁.
(17) SW, XⅤⅢ. S. 159.

参　考　文　献

Frank, Ernst: Liebe zu Stifter, Augsburg: Adam Kraft Verlag 1968.

Steffen, Konrad: Adalbert Stifter Deutungen, Basel und Stuttgart: Birkhäuser Verlag 1955.

Roedl, Urban: Adalbert Ssifter in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Reinbek bei Hamburg: RowohIt Verlag 1965.